

## 日弁連北欧調査

### (概要)

6月8～13日、日弁連公害環境委員会・自然保護部会の調査でスウェーデンに行ってきました。

(なお、本来の調査期間は6月4日から6月13日までで、

調査先もフィンランドとスウェーデンの二カ国でしたが、

さすがに小生はそこまで日程を取ることは困難だったため、後半のスウェーデンだけ参加しました。)

なお、今回の調査目的は以下のとおりです。

自然保護部会では現在、日本の林業が衰退傾向にあり、

森林の適切な管理がなされていないことから、森林の荒廃が進んでいることを憂慮しており、

国内外における先進的な事例を研究し、今後の日本の森林政策を提唱していきたいと考えています。

そして、スウェーデンやフィンランドは、日本でも先進的な福祉国家として知られていますが、

最近では環境保全の先進国としても注目されると共に、世界有数の森林国でもあり、

両国はヨーロッパで一、二を争う森林率(国土に占める森林の割合)を誇ると共に、

林業は現在でも両国の主要産業となっていることから、

ぜひ日本の森林政策においても参考にしたいと思い、今回調査に行くことにしました。

### (6月8日・ストックホルム到着まで)

スウェーデンの首都・ストックホルムは北欧最大の都市(市域人口80万、都市圏人口200万)ですが、

なぜか日本からの直行便が無いので、関空からフィンランドのヘルシンキ空港に着陸し、

そこからストックホルムへ向かいます。

ヘルシンキ空港に近づくとフィンランドの美しい風景が見えてきます。

首都ヘルシンキからそう遠くないはずですが、森と湖が至るところに見え、

さすが「森と湖の国」と言われるだけのことはあります。

なお、フィンランドの国土面積は日本を若干下回りますが、湿地は国土の約3割を占めており、

湿地面積はロシア、カナダ、アメリカ、インドネシアといった大きな国に次いで世界第五位となっています。

そしてストックホルム空港に入りますが、なぜか入国の際のチェックがありません。

ヘルシンキというEU域内の空港で既にチェックを済ませている以上、

改めて入国チェックは必要ないということで、EU統合を改めて感じました。

なお、空港からストックホルム駅に向かう電車でも豊かな森が見られ、

市街地に入っても多くの森が町を包んでいました。

### (6月9日午前・ストックホルム市内観光)

他のメンバーがストックホルムに到着するのは9日の昼近くなので、

翌朝は朝食後しばらく市内を散歩してきました。

ストックホルムは、スウェーデン第三の湖・メーラレン湖とバルト海が繋がる所に位置する町で、  
周囲一帯には多くの島々が散在しており

(岩礁も合わせると半径50キロ以内に20000以上あると言われています!)

市街地も 14 の島々で構成されています。  
従って、町のいたるところに水路があり、  
水路と古い建物とがとても美しいコントラストをなしていました。

特に、中心部のすぐ南の「ガムラ・スタン（英訳すると old town）」  
と呼ばれる小さな島（東西南北とも 1 キロに満たない）は、  
旧市街だけに、細い石畳の道が迷路のように入り組んでおり、映画を見るかのようです。  
そう言えば、宮崎駿の映画「魔女の宅急便」もこの町をモデルにしたと聞いたことがあります。

（ 6 月 9 日午後・自然保護局 ）

昼からは本格的に調査で、まずスウェーデン自然保護局を訪問しました。  
スウェーデンでは 1999 年、環境関係の法律を一つにまとめた「環境法典」を制定しました。  
こうした法規定のあり方は、自然保護のための諸政策が  
所轄官庁ごとに分断されることを防ぐものとして注目されますが、  
その際に、「環境目標」も制定されました。

そして各目標が 2020 年において達成されそうかを纏めた報告書  
「スウェーデンの環境政策の目的」が毎年公表されていますが、  
各目標の達成度について何と「ニコニコマーク」「困ったマーク」などを使って表現していました。  
議論もあったようですが、人々が近づきやすいように敢えて使ったとのことでした。

また、スウェーデンの法律上、自然保護区は行政が一方的に決められないこともあります。  
保護区指定の際には担当官が所有者とじっくり話し合っ、  
生態系にとってその土地がなぜ必要か等について対話を進め、信頼関係を作っていくとのことでした。

報告書の大胆なデザインと、保護区指定の対話。  
市民 行政への情報アクセスの促進と、行政 市民の実質ある対話。  
コミュニケーションこそが民主主義、そして環境政策の基礎と改めて感じました。

（ 6 月 10 日・森林管理局 ）

10 日は、首都ストックホルムから、森林管理局のあるヨンショーピン市に向かいました。  
ヨンショーピンはスウェーデン南部にある人口約 7 万人の町で、決して大きな町ではありませんが、  
周辺には豊富な森林資源があることからここに森林管理局が置かれたようです。  
そう言えば日本でも、中部における林野行政の中心地は名古屋ではなく長野でした。

さてスウェーデンでは 93 年に森林法が改正され、  
木材生産に加えて生物多様性の維持に同等の重みが置かれることになり、  
一方木材生産については私的生産の自由裁量が拡大されることになりました。  
もっとも、前者には林業者に生物多様性維持の責務を課するという面もありますので、  
後者とは一見矛盾するようにも見えます。

そこで、どのように政策目的を図っているのか尋ねたところ、  
そもそも自由裁量の拡大とは、経営に関する自由度の拡大であり伐採には制約がある点に加え、  
伐採の際には所有者と森林管理局がよく話し合う、  
つまり非権力的なコミュニケーションを通じて政策を達成するとのことでした。

これも、前日の環境保護局で見たコミュニケーションの重視ですが、  
ただこれを日本語にすると「行政指導」とも言い、運用次第では、正規の手続によらない行政となり、  
行政によりイレギュラーに環境が破壊されることにもなりかねません。  
コミュニケーションが適切に作動するには、  
市民が実質的な意味で政府を制御していくことも不可欠といえます。

(6月11日午前・ヴェクショー市)

次は、ヨンショーピンから100キロほど離れたヴェクショー市役所の訪問です。

ヴェクショーも人口8万程度の町ですが、06年時点で93年に比べCO2排出量を30%削減するなど  
先進的な環境政策を行い、「The Greenest city in Europe」として知られています。  
スウェーデン国内はもちろん、日本など海外からの見学も多く、  
見学者の出身国として一番多い(スウェーデンより多い)のは実は中国で全体の30%とのことでした。

CO2削減の鍵となったのが、豊富な森林資源の活用。  
つまり、燃料供給は79年には石油が79%だったのが06年には80%が木材バイオマスとなり、  
エネルギー供給のうち木材バイオマスが占める割合も15%から37%となりました。  
木材バイオマスは再植林により供給可能であることから、CO2排出は計算上0となります。  
そして、発電で用いられる木材も、発電の際に水を温めて  
地域に温熱水を供給し、電気と熱の両方を生産しています。  
こうした地域暖房システムへの参加は市民の自由選択ですが、  
暖房代は自分で石油を買った場合の半額のため、多くの人が参加しているようです。

そして町のイメージが向上した結果、  
企業イメージの向上を狙ってあえてヴェクショーに立地する企業も増え、  
ヴェクショーのGDPは93年比50%上昇しました。  
ちなみにスウェーデン全体ではCO2排出は93年比で10%減り、GDPは40%上昇したとのことでした。

もっとも熱やエネルギー部門のCO2排出が減った結果、  
現在のヴェクショーのCO2排出源は78%が輸送となり、  
今後更にCO2を削減するとなると、輸送部門の大幅削減が鍵となります。  
福井では原油高騰以来、自動車から鉄道利用に切り替える人が増えており、  
「自動車保有率全国一」の汚名返上が期待されるようですが、  
ヴェクショーは福井より更に小さな町。公共交通の整備は容易ではありません。

ヴェクショーの挑戦は、これからが正念場と言えます。

(6月11日午後・SODRA)

午後は、やはりヴェクショーに本部のあるSODRA(南スウェーデン森林所有者協会)です。同協会はスウェーデン南部に5万人の会員(この地域の森林所有者の半分)を抱えており、森林所有者の委託を受けて森林を管理し、森林から収益を上げています。06年度は180億クローネ(日本円にして約3000億円)の収益を上げ、林業企業体としてはスウェーデンで4位の規模を誇り、上位3つはいずれも株式会社であることから、協同組合としてはスウェーデン最大となります。

このように産業としても好調なスウェーデン林業ですが、最近スウェーデンは好景気のため中々林業に人が集まらないことから機械化を要するとのことで、この日説明してくれた人自身、森林技術課長として機械の開発をしているとのことです。

もっとも、日弁連メンバーから「傾斜地でも使えますか」という質問が出たところ、回答曰く、傾斜地でも使っている「が、スウェーデンより傾斜がきついと聞いているので日本ではどうか」そう言えば、ストックホルムからヴェクショーに至るまで、ほとんど平地でしたが、ほとんどが森林でした。日本林業の課題を改めて実感しました。

(6月12日・帰国の路へ)

調査終了。翌12日は、まずコペンハーゲン空港(ヴェクショーは南部のためこちらの方が近い)からヘルシンキに向かいます。スウェーデン最南部、デンマーク国境に近いスコーネ地方に入ると一面の森林が一面の穀倉地帯に変わります。日本もスウェーデンも国土に占める森林率は変わりませんが、北国スウェーデンでは、「平坦でも」寒くて耕作に適さない土地が森林になっているようで、これが両国林業の条件の違いのようです。

そして、デンマークはオイルショック後風力発電に力を入れ、石油にも原子力にも頼らないエネルギー自給を目指していますが、デンマークに近いスコーネでも、風力発電所を沢山見ることができます。

そして、ヘルシンキでは待ち時間が5時間あるので市内観光をしてきました。スウェーデンでは英語・スウェーデン語表記が並んだ時は英語に目が行きましたが、フィンランドではフィンランド語・スウェーデン語の併記が多く、フィンランド語はヨーロッパ諸語とは異なる系統の言葉のため、今度はスウェーデン語に目が行きました。しかし実は、フィンランド語は日本語と同じ系列のウラル・アルタイ語系。一度この美しい国の言葉を勉強したいところです。